HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道林業と北大
Author(s)	小関, 隆祺
Citation	北大百年史, 通説, 789-800
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30038
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p789-800.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道林業と北大

小関隆祺（たかよし）

1 クラークの林政意見

明治のはじめ、北海道はほとんど未開の森林で被われており、農業開拓は森林の伐採からはじめられた。木材の市場価値が未だ小さかったこともあり、森林は開拓の邪魔物と意識された。当初は森林の保護管理体制が極めて不充分であり、林業経営に対する関心も低かった。開校当初の札幌農学校の授業科目をみても森林に関するものはほとんどなかったのは止むを得なかったが、アメリカ東部の開拓地における森林の涸渇状況を知っていたクラークは、森林の取扱いに強い関心を示している。

クラークは一八七七年（明治一〇）開拓使より北海道の林政に関する意見を求められ、黒田長官に対し一四項目にわたる質問に答えるという形で、林政に関する意見を述べている。クラークは林業教育の必要性を強調し、森林保護の具体的な方法にまで言及しているが、この回答書は、森林の保護、取締に腐心し、適当な対策を模索していた開拓使当局に対し、好参考資料を供したものといわれている。(1) 逢坂信忠はその著『クラーク先生詳伝』においてこの点に言及し、「彼の北海道開発に関する寄与貢献中、その最大にして且つ最も本質的なるものは実に山林保護法に関してである」(2)と述べている。

2 札幌農学校森林科と森林科生徒給費規程

大学程度の林業高等教育機関として北大林学科が設置されたのは、一九〇七年（明治四〇）札幌農学校が東北帝国大学農科大学となった年である。実際に授業を開始したのは林学講堂（古河講堂）が落成した一九一〇年で、一九一三年（大正二）に第一回目の卒業生九名をだした。しかし北大林学科には札幌農学校時代に若干の前史がある。すなわち、一八九九年（明治

三二）の森林科の設置である。

札幌農学校における体系的な林業教育は、この森林科（中等学校程度）の設置にはじまるが、これよりも以前、すでに一八八七年（明治二〇）当時、農学科、工学科、農芸伝習科の課程中に山林学という名称で一科目を設定しており、佐藤昌介が自ら授業を担当していた。(3)

佐藤昌介は林業教育についても強い関心を持っており、一八九八年（明治三一）文部省に提出した「札幌農学校拡張意見書」(4)の中で、水産科、商業科、医学科などとともに林学科の新設を強く要求し、その中で「森林教育を受けたる林業者をして森林を経営監督せしむるの必要あり」と述べ、この要求が北海道庁の要望でもあることを表明している。この要求は認められなかったが、翌一八九九年（明治三二）あらためて簡易林学科の新設を要求し、(5)これが森林科として認められた。

森林科は中学第三学年を終えたもの、またはこれと同等以上の学力を有するものを入学資格者とし、修業年限を三ヵ年とする中等程度のものであった。一八九九年（明治三二）五月新島善直が最初の林学専任教授として発令された。森林科は一九〇一年（明治三四）にはその程度を高め専門学校程度となり、一九〇五年（明治三八）には林学科と改称し、その卒業生は林学得業士と称することができるようになった。この林学科は東北帝国大学農科大学に林学科が設けられたのちは、附属林学実科となったのである。

森林科は一九〇二年（明治三五）最初の卒業生四名、翌年は三名の卒業生をだしたにすぎなかったが、三年目の一九〇四年（明治三七）には一五名の卒業生をだしている。卒業後の動向については詳細は不明であるが、第二期生のうち一名、(6)第三期生のうち九名(7)は北海道庁林務課に就職の予定であったことが記録されている。

新島善直教授が赴任したのち、次の諸教官が相次いで赴任し次第にその教育体制は整備されていったが、当初は、北海道庁あるいは御料林の技師数名を講師として依嘱し、教官の不足を補った。

一九〇二年（明治三五）宍戸乙熊教授
一九〇六年（明治三九）堀観次郎教授　宮原朝吉助教授
一九〇七年（明治四〇）小出房吉教授

森林科の設置が北海道庁の強い要望であったことはすでに述べたとおりであるが、北海道庁は森林科が設置されると間もなく、札幌農学校に依嘱して森林科生徒に学費を給与する制度を定めた。

札幌農学校森林科生徒給費規程（明治三十四年四月十七日庁令六二号）

第一条　札幌農学校森林科生徒ニシテ、北海道庁ヨリ給費ヲ受ケントスル者本規程ニ依リ別紙甲号書式ノ願書ヲ差出スヘシ

第二条　規程ニヨリ給費金額ハ一箇月金八円トス

第三、四条　略

第五条　給費ヲ受クル生徒卒業ノ上ハ其ノ給費ヲ受ケタル年数ニ二倍セル期間北海道庁長官ノ示命スル職務ニ従事スルノ義務アルモノトス

第六条　給費ヲ受ケタル生徒卒業後北海道庁長官ノ示命シタル職務ニ従事セサルトキハ給費シタル金額ハ即時返納セシム

第七、八条　略

一九〇三年（明治三六）当時、この規程により道庁より給費を受けている森林科生徒は三年級に二名、二年級に八名、一年級に六名であった。(8)

3　北大林学科の創設

一九〇七年（明治四〇）札幌農学校が東北帝国大学農科大学に組織換えされると同時に、農学科、農芸化学科、畜産学科とならんで林学科が新設された。大学程度の林学科としては東京帝国大学の林学科に次いで我が国二番目のものである。一九一〇年（明治四三）九月十一日を授業開始日と定め、これに前後して林学各講座の開設と教官の充足が行われた。

一九〇九年（明治四二）林学講座（のちの森林経理学）小出房吉教授

一九一〇年（明治四三）林学第二講座（のちの造林学）新島善直教授

一九一一年（明治四四）林学第三講座（のちの森林利用学）宮井健吉助教授（一九一五年教授）

一九一一年（明治四四）林学第四講座（のちの砂防工学）内山幸三助教授のち影山純介、吉川元民助教授

一九一二年（明治四五）林政学及森林管理学講座宍戸乙熊助教授（一九一三年教授）

一九二一年（大正一〇）森林工学（のちの林産製造学）影山純介助教授（一九二七年教授）

林学科創設当時の教官はいずれも東京帝国大学林学科卒業の林学士ないし林学博士であって、これ以後本格的な林学高等教育を展開すると同時に、北海道林業界の最高指導者として縦横の活動をすることになる。

4　森林開発の進展

札幌農学校に森林科が設置された一八九九年（明治三二）か

ら、東北帝国大学農科大学に林学科が創設された一九〇七年（明治四〇）ころは、北海道の林業界にとって極めて重要な時期であった。すなわち日清戦争と日露戦争終了後の日本資本主義発展期に相当し、北海道では農業開発が急速に進展し、また商品生産のための森林伐採が急激に盛んとなった時期である。北海道の森林開発は主として本土において成長発展しつつあった資本がこれを担うことになった。この前後の北海道林業に関する主要な出来事を列挙すると以下のとおりである。(9)

○拓殖政策・土地分割に関連すること

一八八六年（明治一九）北海道庁設置、積極的資本誘置政策をとる。「北海道土地払下規則」、大地積処分の方針を採用。

一八九六年（明治二九）「殖民地選定及び区画施設規程」

一八九七年（明治三〇）「北海道国有未開地処分法」、大地積処分方針を拡大。

一九〇八年（明治四一）「北海道国有未開地処分法」改正。

一九一〇年（明治四三）第一期拓殖計画（一九二六年まで）

○国有林再配分に関すること

一八九〇年（明治二三）御料林創設、国有林のうち二百万町歩を御料林に編入、一八九四年（明治二七）そのうち六三万町歩を除いて返還（実測九〇万町歩となる）

一八九九年（明治三二）「官林種別調査」これは一九〇七年（明治四〇）の北海道国有林整理綱領の基礎となった。

一八九九年（明治三二）東京帝国大学演習林創設。

一九〇一年（明治三四）札幌農学校演習林創設、一九一二年（大正元）まで。

一九〇六年（明治三九）道有林創設、一九二一年（大正一〇）まで。

○森林採取資本の進出に関すること

一八九八年（明治三一）前田製紙合名会社創設、北海道最初の木材パルプ工場を釧路に建設。

一九〇二年（明治三五）三井物産株式会社、砂川に木工場建設。

「北海道国有森林原野特別処分令」、大規模工業者等に一〇年分の原料を一度に随意契約によって処分する年期特売の途を開いた。

一九〇六年（明治三九）富士製紙株式会社、釧路、金山、江別に工場建設。

一九〇八年（明治四一）王子製紙株式会社、苫小牧に工場建設。
○森林経営に関すること
一八九七年（明治三〇）森林法制定、北海道、沖縄は保安林の条項のみ適用。
一八九八年（明治三一）北海道炭砿鉄道株式会社（のちの北海道炭砿汽船株式会社）北海道造林合資会社大規模造林をはじめる。
御料林仮施業案編成に着手。
一八九九年（明治三二）国有林仮施業案編成に着手。
一九〇二年（明治三五）北海道林業会創立。
一九〇七年（明治四〇）森林法改正。
一九〇八年（明治四一）国有林を五営林区署に分けて管理する。
林業試験場設置。
一九一一年（明治四四）北海道各地に大山火事発生。

5　北海道林業会

以上述べたように、当時の北海道林業界は極めて多事であったが、北海道庁をはじめ御料林・民間を含めて林業の専門教育を受けたものは極めて少なかった。そのため、札幌農学校森林科および東北帝国大学農科大学林学科の教官として赴任した東京帝国大学林学科出身者たちは、ただちに北海道林業全体についてのリーダーたらざるを得なかったわけである。北大林学科の北海道林業へのかかわりは、まずもって林学科初代の教授たちによって担われた。ちょうどそのころ、官界、学界、民間を含めた北海道林業界全体の協力のための恰好な受け皿として北海道林業会があったのは、北海道林業のために好運であったというほかはない。

北海道林業会は一九〇二年（明治三五）十一月九日、札幌区豊平館において創立総会を行っているが、道内各界が協力し営林の実をあげることを目的とし、北海道庁林務課および御料局札幌支庁所属の技術官僚、民間林業会社、木材業者など北海道林業界の関係者を網羅した任意団体として創立された。元農商務省山林局長であった高橋琢也を会長にむかえたが、札幌農学校からは評議員として佐藤昌介、新島善直、学芸委員として宮部金吾、新島善直、宍戸乙熊らが参加している。会員は創立当時すでに四五〇名をこえており、北海道における唯一最大の林業団体であった。

北海道林業会は元道庁林務課長で、当時北海道造林合資会社の技師兼支配人であった田中壌らの熱心な働きかけによって創設されたが(10)、札幌農学校森林科教授の新島善直もその中心人物

の一人であった。新島善直は評議員、学芸委員のほか幹事、のちに幹事長をもかねており、会運営の責任者の一人であった。宍戸乙熊、小出房吉をはじめ、林学科創設によって赴任した教官も相次いで評議員ないし学芸委員に名をつらねており、北海道林業会の重要構成員として大きな役割を果した。佐藤昌介は一九一一年（明治四四）から一九二二年（大正一一）まで会長の任についた。

北海道林業会は一九二二年（大正一一）社団法人に組織を変え、会長に北海道庁長官をいただくことになり、事務所を北海道庁内に置き、補助金を受けることになったなど、若干の性格変更はあったが、一九四二年（昭和一七）、戦時団体整理のため解散するまでの四〇年間、北海道林業界の中枢にあって多面的な活動をし、北海道林業に対して重要な貢献を果した。一九三七年（昭和一二）当時会員数二六〇〇名であった。(11)

6　北海道林業会報

北海道林業会は、多数の出版物を刊行し、各種の講演会、講習会等を主催するなど多くの足跡を残したが、その中でも特筆すべきものは月刊機関紙『北海道林業会報』の発行である。『北海道林業会報』は一九〇三年（明治三六）一月第一巻第一号を発行し一九四二年（昭和一七）六月終刊号を発行して廃刊となったが、その間四〇年間通巻四五九号に及んだ。新島善直は終刊号に「北海道林業会報の解消」と題して寄稿し、「今北海道林業会報四十巻を並べて之を通覧するに、林業会が如何に北海道の林業と密接の関係を持して進み来ったかを認めることができる。此の間幾多の当事者が官に民に森林の愛護と利用に苦心を重ねたことを知り得るとともに、その変遷が紙上に明確な跡を示してゐる」と述べているが、(12)北海道林業会報はその発行の期間における北海道林業史の最大の資料となった。

北大林学科の教官は、すべてが北海道林業会報の寄稿者として重要な位置を占めている。教官の研究業績は『北海道大学農学部附属演習林研究報告』（一九一五年第一巻第一号発行）、『札幌農林学会報』（一九〇八年第一号発行）をはじめ、『北海道大学農学部紀要』、『日本林学会誌』などに発表されているが、「学術と実地」(13)に関するものは多くこの会報に載せられた。特に新島善直は創刊号から編集者の一員として関与し多くの論説を寄稿しているほか、質疑応答欄をも担当したが、論説、研究、解説等に関する論文は四〇年間に八〇編をこえるとみられるが、その多くが大正中期までに掲載されているから、創刊から十数年間に及ぶ新島善直の貢献は極めて大きいといわなければならない。宍戸乙熊、小出房吉、中島広吉各教授の寄稿も極めて多い。なお大正後期には加納一郎（一九二三年北大林学科卒のち

朝日新聞記者)、昭和初期には宮脇恒(一九二五年北大林学科卒のち北大教授)が実際の編集人として活躍した。

7 野幌林間夏季大学

北海道林業会が主催した諸事業のうち、極めてユニークな行事として一九二四年(大正一三)から三回にわたって実施された林間夏季大学がある。これは一般市民を対象として森林知識の普及と林間生活の体験を目的とし、野幌国有林を会場に約一週間の天幕生活を送り、この間文化講演のほか林内視察、動植物採集、音楽会、盆踊、工場見学などを織りこんだ多彩な企画であった。開催趣意書には「よろしく森林智識の普及を計りて施業経営の理解を求め、自然に交りて生活の向上を期し、以て林業の発展と民心の更新に資すべきなり」[14]と述べられている。

野幌国有林は一九〇八年(明治四一)北海道林業試験場の設立以来、野幌試験林とされていた。面積三五〇〇町歩の天然平地林で、一九一四年(大正三)以来禁猟区とされ、また一九二一年(大正一〇)に天然記念物に指定された三二〇町歩の原始林を含んでいたので、野幌原始林と称されていた。札幌より比較的近い所としては良く保存された貴重な天然林であった。

講演の題目と講師の氏名をあげると以下のとおりである。

一九二四年第一回

一 自然科学の意義 北大予科教授 青葉万六
二 南洋の自然 北大水産専門部教授 西村眞琴
三 世界の文化と森林の民衆化 東大教授 本多静六
四 民族性とその芸術的表現 富田砕花
五 気候と文化 東北大教授 田中館秀三
六 桐の話 北大教授 小出房吉
七 人生観の基礎 北大予科教授 藤原正
八 樹木の病 北大教授 宮部金吾
九 自然美と森林美 北大教授 新島善直

一九二五年第二回

一 生命論 北大教授 太黒薫
二 国際社会の帰趨 東大助教授 横田喜三郎
三 自然と工学 北大教授 小川敬次郎
四 森林の文化的施設と国立公園 農林省嘱託 田村剛
五 民族と家畜 北大助教授 山根甚信
六 国民生活と森林 北大教授 宍戸乙熊

一九二六年第三回

一 人生における科学の価値 理学士 原田三夫
二 原始林について 北大教授 新島善直
三 性の細胞学 北大教授 小熊捍
四 神に関する諸問題 柳宗悦

選ばれた主題と講師の顔振れから、この企画の幅の広さをみることができよう。野幌林間夏季大学は中央の新聞にもとり上げられたため[15]府県からも多数の参加者があったほか、児童林間学校の流行をも誘発することとなった[16]。北海道林業会は、第一回と第二回の講演集を刊行したほか、単行本『野幌』を別に刊行し、市民の森林への関心をたかめる役割を果した。林間夏季大学は北海道庁技師　林常夫（のちの道庁地方林課長、林務課長、勅任技師）が発議者[17]とされているが、当時北海道林業試験場長を兼ねていた新島善直がこれに深くかかわったことはいうまでもない。折柄北大が帝国大学となっていたため、他部局の教授も講師として参加していること前掲のとおりである。

8　北海道主要樹木図譜

一九一三年（大正二）、北海道庁は東北帝国大学農科大学教授、宮部金吾と同助教授工藤裕舜を嘱託に任命し、北海道産の主要樹木について学術上の研究と図譜の作成を依嘱した。宮部と工藤は六年間の歳月をかけて、道庁技手須崎忠助の写生による図版を附して一九一九年（大正八）これを完成した。北海道庁は『北海道主要樹木図譜』として同年から一九三一年（昭和六）まで二八輯に分けて公刊した。

同図譜は八五種類の主要樹木について、その樹形の特徴はもとより葉、花、種子などの形態、産地、分布、用途、材の特質などにわたって詳細な記載を和文と英文の両方で行い、一種について一枚の図版をつけたものである。その記載・図版はともに極めて精緻・正確なものである。宮部、工藤はその緒言の中で「本図譜ノ説明ハ主トシテ本道ニ於テ採集セル材料ニ就キ忠実ニ記載セルモノニシテ今後更ニ研究ノ結果種名ノ変更セラルル場合ヲ生ズルコトアルモ記載及図譜ハ変更スル要ナカルベシ」と述べて苦心の成果に自信を示しているが、図版もまたその当時の印刷技術としては最高水準の華麗なものである。

『北海道主要樹木図譜』は戦前戦後を通じて恐らく我が国で最も立派な樹木図譜であり、世界中をみてもこれに匹敵するものは少ないと考えられる。北大が世界にほこりうる学術上の記念碑のひとつである。

9　北大林学科と北海道林業

札幌農学校の時代を含めて北大林学科の北海道林業界に対する関与は、最初は主として林学科創設に参加した教授たちによって担われた。すでに述べたところにより、その活動の一端をうかがうことができるが、同時に、各自の専門分野においても活発な研究活動を展開し、北大林学科の基礎をつくりあげるとともに、北海道林業の経営発展に寄与するところが大きかっ

た。以下、北大林学科を代表する諸教授の研究業績と北海道林業に対する貢献の一部を紹介することとする。

新島善直は北大にとって最初の林学専任教授であるが、札幌に農学校森林科教授として赴任した時には二八歳に満たない少壮気鋭であった。一九三四年（昭和九）退官まで三五年間教授の職にあったわけであるが、その間一九一二年（明治四五）から一九三四年（昭和九）まで、北海道庁技師をも兼ねて北海道林業試験場長の職にあった。専門としてはコガネムシ、キクイムシなど森林害虫に関するもの、トドマツ、エゾマツの人工造林、天然更新に関するものなど多くの研究業績がある。これらの業績は、北海道における造林業確立のための基礎をつくりあげたものであり、その後、造林学講座の後継者たちにより引き継がれて今日にいたっている。一九〇〇年（明治三三）、日本ではじめて『森林保護学』という著書を刊行し、この学問分野の体系化に努力し再度の改訂を経て一九二三年（大正一二）、一九二五年（大正一四）『新編森林保護学』二巻を完成した。また、村山醸造（一九一三年林学実科卒、一九一六年林学科卒）の協力によって一九一八年（大正七）、『森林美学』を刊行したが、森林美学は北大林学科における特異なる授業科目のひとつとして今日まで継承されている。

『北海道山林史』は新島善直の試験場長兼務に関し、「二十二年間の長きに亘り、地方的政策に煩わさるることなく、各種の試験を続行し、林業経営の普及宣伝に努め、寄与するところ少くなかった」[18]と述べている。一九三六年（昭和一一）には天皇の北海道行幸に際し、林業功労者として林駒之助（元北海道庁勅任技師）らとともに単独拝謁の栄に浴した。また新島善直は歌人として北大短歌会、札幌短歌会に所属し、札幌歌壇の重鎮であった。歌集として『書簡に代へて』（一九二四年）と無題の第二歌集[19]がある。有名なものとして次の一首がある。

禁断の木の実にふるる心地して
まり藻をさぐる胸のとどろき

宍戸乙熊は新島善直に次いで二番目の林学専任教授として札幌農学校森林科に赴任した。東京帝国大学林学科を卒業した一九〇二年（明治三五）のことである。農科大学になってからは林政学講座を担任した。一九三八年（昭和一三）に退職するまでの期間は三六年間であるから新島善直よりも在職年数は少し長いことになる。林学科創設時に新島善直、小出房吉らとともに重要な役割を果し草創の苦しみをともにした。その後も先輩である両教授を扶け、またそのあとをついで北大林学科の基礎づくりの中心となった。研究業績としてはドイツをはじめ諸外国の林業制度に関するものが多いが、北海道林業に対する具体的提言も少なくない。「国民生活と森林」[20]と題する報告は『北

海道林業会報』（一九二五年）に連載されたが、林学の狭い領域にとどまらない視野の広さがあり、今日においてもその意義を失わない。

小出房吉は東北帝国大学農科大学に林学科を置くための教授要員第一号として盛岡高等農林学校教授から農科大学教授となり、最初に開設された林学講座すなわち森林経理学講座の担任となった。札幌に赴任当時すでに林学博士であり、赴任直後の一九〇八年（明治四一）には『森林政策』という著書をも刊行しており、すでに全国的にみても大家の域に入っていた。新島、宍戸両教授の先輩でもあったので、農科大学林学科、林学実科、演習林などすべての運営において中心となり、強力なリーダーとなった。学の内外において精力的な活動を行い、研究の面では森林気候学、測樹学、森林経理学など広い分野について多くの業績をあげ、また多数の有為の人材を養成した。惜しくも一九二六年（大正一五）十月二十日病気のため現職のまま逝去した。新島善直は旅先でこの訃報をきいて「あたたかに冬過ごさめと言ひけるをやつれし頬のみ眼に残る友」と詠んでその死をいたんでいる。

札幌農学校森林科、同林学科、北海道帝国大学林学科および林学実科の卒業生は、その多くが北海道内外の林業関係の官界あるいは民間に就職し、林業技術者として活躍することになったが、経営者になった人はごく少数に限られている。これは我が国の国公立の農業関係大学専門学校の卒業生について共通していえる特色である。

大学林学科としてすでに一八八二年（明治一五）設立された東京山林学校を母体として出発した東京帝国大学林学科が、多数の卒業生をだしており、国内の主要な林業機関に幹部として配属されていた。そのため、北大林学科の卒業生は、北海道や府県の国有林、御料林および民間会社に就職したもののほか、多くの英才が外地植民地たる台湾、樺太、朝鮮、満州などへ活躍の舞台を求めて進出していった。

北海道内では先述の林駒之助、林常夫などの東京帝国大学林学科の優秀な卒業生が官界のトップをしめており、北大林学科卒業生で道内に就職したものは、主としてこれらの指導者の薫陶を受けることとなった。北大林学科の卒業生が道内林業界で一定の地歩を占めて、その主導力を発揮できるようになるのは大正末期から昭和初期以後のことである。

一方、大学の中では第一期の卒業生中島広吉が卒業後大学院生として母校に留ったほか、相次いで少数ではあるが優秀な人材が大学にとどまり、後年になって林学各講座の第二代目担任教授はすべて北大出身者でしめられるようになったばかりでなく、他の高等専門学校、林業試験場などに人材を供給すること

ができるようになった。

中島広吉は、一九一三年（大正二）北大林学科第一期生として卒業し、翌年助教授となり、測樹学を中心とした広い分野について多くの研究業績を発表し、少壮研究者として華々しいスタートをきった。一九二三年（大正一二）には「気象要素の樹木生長に及ぼす影響に就て」（独文）によって、北大として最初の林学博士となった。小出房吉の死後、一九二九年（昭和四）森林経理学講座担任教授となった中島は、東京帝国大学出身の初代教授がほとんど退職した後、北大林学科の大黒柱として、また北大林学科を代表する林学者として目ざましい活躍をした。学内的には一九三八年（昭和一三）以来一三年間、演習林長と林学科主任をかね、定年退職前の一年半は農学部長の職についた。中島広吉は第一期生としての責任を痛感して、学界は勿論、官界、民間にもその発言力を強めようと努力し、卒業生の就職にも多大の苦心を払った。駒場出身者（東京帝国大学農学部ははじめ駒場にあったのでその卒業生をこう呼んだ）に対し、札幌出身者の地歩を築くことに非常に大きな関心を持った。卒業生の中から部長、局長、重役等の顕職につく者がでたときはその喜びをかくさなかったが、不遇で逆境にある後輩に対しては人知れず深い配慮を惜しまなかった。

中島広吉は多くの研究論文を発表しているが、理論的なものにとどまらず、実際に役立つものについても独創的な研究を行い、平明な記述によってこれを発表している。単行の著書のうち主要なものを挙げると次のとおりである。

『森林立木材積表』一九三〇年（昭和五）
『樹幹析解』一九三一年（昭和六）
『林価算法及森林較利学問題解義』一九三一年（昭和六）
『森林経理学新講』第一巻　一九三七年（昭和一二）
『森林経理学新講』第二巻　一九四七年（昭和二二）
『林学』朝日講座　一九四七年（昭和二二）

『森林立木材積表』は一九四七年以降『北海道立木幹材積表』と改訂されたが、これは森林立木の幹材積を直径のみを計測して求めようとする独創的なものであり、北海道国有林をはじめ広く採用されて実用に供された。従来、立木の幹材積は直径と樹高を測り、これに樹種ごと地域ごとに異なる形数を乗じて求めたが、中島は膨大な資料を統計学的に処理して大量の計算を行い、直径のみで全道的に使用にたえる平均値を算出したのであるが、その北海道における森林経営に対して果した貢献は極めて大きい。また『樹幹析解』は、我が国における林学教科書の中で名著のほまれ高いものである。

以上、主として大正期までの北大林学科と北海道林業とのかかわりに記述を限定したので、林学科初代教授のうち、新島善

直、宍戸乙熊、小出房吉各教授、北大林学科卒業生のうち中島広吉教授に限ってその業績を紹介した。その他の諸教官および学外で活躍した卒業生の事績については省略せざるを得ない。その後も北大林学科が北海道林業界の中心的存在として重要な役割を果したことは明白であるが、北大林学科の研究活動と卒業生の活躍は北海道に局限されたというわけではなく、その舞台は全国および海外に及んでいることはすでに指摘したとおりである。民間、官界で活躍した人の中で名声をあげた人も多い。しかし北大林学科の特徴は、地味ではあるが縁の下の力持的な部分で、実質的に社会に貢献した人たちがはるかに多い点にある。困難な状況で他の人があまり好まない局面をあえていとわない気風があるという評価をする人がいるが、この気風は今日でもひきつがれているように思う。

〔注〕

(1) 北海道『北海道山林史』一〇六―一〇八ページ
(2) 逢坂信悉『クラーク先生評伝』二三〇ページ
(3) 北海道帝国大学『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』一一〇・一一二・一一五ページ
(4) 同右、一四五―一五一ページ
(5) 同右、一五五―一五六ページ、「簡易林学科新設の必要」の説明書が記載されている。
(6) 『北海道林業会報』第一巻第七号、四〇ページ
(7) 同右、第二巻第六号、二三ページ
(8) 同右、第一巻第一号、四一ページ
(9) この項については主として小関隆祺「北海道林業の発展過程」(『北海道大学農学部附属演習林研究報告』第二二巻第一号、一九六二年)によっている。
(10) 長池敏弘「北海道林業の先覚者田中壌」『札幌林友』一一九号、二六―四一ページ
(11) 「北海道林業会年表」『北海道林業会報』終刊号、一九四二年
(12) 『北海道林業会報』終刊号、一九四二年、六八ページ
(13) 『同　右』同号、同ページ
(14) 『同　右』第二二巻第七号一ページ
(15) 『同　右』第二三巻第九号四五ページ
(16) 『同　右』第二四巻第二号二〇ページ
(17) 『同　右』同号、同ページ
(18) 北海道『北海道山林史』一〇六四ページ
(19) 『札幌の短歌』一二五・二三六ページ
(20) 宍戸乙熊「国民生活と森林」『北海道林業会報』第二三巻第九、一〇、一一、一二号

(北海道大学農学部教授)